実践報告

ベトナム人留学生（中級レベル）を対象とした発音指導
―自己モニター力養成の試み―

原　彩子・加藤　玲子

要旨

本実践報告は、ベトナム人留学生の多くが問題意識を持っている発音を取り上げた発音指導の実践を記録したものである。発音練習では、「自己モニター力」を養うことを主な目的とし、分節音（単音）の「聞き分け」と「言い分け」の練習を通して、独自の発音基準を作り、発音への意識を高めることによって学生自身による持続可能な練習ができるようになることを目指した。また、パソコンやスマートフォンなどの「音声入力」機能を利用し、発音の自主練習に有効かどうかも併せて検証した。

本実践の結果、発音への意識が高まり、自己モニター力の養成という点では、ある程度の成果を得られた一方、発音の上達度や音声入力の有効性については、課題が残る結果となった。

キーワード：ベトナム人留学生、日本語教育、発音、自己モニター力、持続可能、音声入力

1. 実践の背景

本実践報告では、留学生が抱える発音の問題について、学生自身による持続可能な練習のきっかけとなるよう「自己モニター」を取り入れた発音指導の実践について報告する。

筆者が担当した城西短期大学春学期「日本語5」と秋学期「日本語6」の科目は、留学１年生を対象にした日本語の科目で、主に文章読解を通して、必要な日本語の語彙や文法・表現の知識を学び、関連した内容について自分の意見をきちんと言えるようになることを到達目標とした授業である。授業では文章を音読し、理解した内容についてディスカッションをしたり、関連内容についてプレゼンテーションをしたりする機会があるが、その際に、発表者の言葉や意図が正しく聞き手に伝わらないことも多かった。その主な原因として、タスクの内容をきちんと理解できていないこと、語彙や表現が正しく使えていないこと、正しく発音ができていないということなどが考えられたが、中でも「発音」が大きな問題であるということは、学生自身も認識していたようだった。実際、学生が抱えている発音の悩みについては、授業中何度も話題にのぼった。例えば、発音が下手くそだと言われた、アルバイト先で子どもっぽいと笑われた、言いたいことが伝わらなかった、などの経験があり、どうしてもうまく発音できない時は、伝えるのを諦めたり、苦手な発音を避け、別の言葉に言い換えたりしているということだった。また、学生からは日本語の文法や漢字については自分で勉強できるが、発音はどうすれば良いかわからないというような話もあったことから、春学期終盤の数回の授業で発音の練習を取り入れることにした。

発音指導当初は学生たち自身が苦手だと認識していた「つ」と「ちゅ」、「ざ」と「じゃ」などの発音を取り上げ、学生の母語の発音と比較し発声する練習を行った。しかし、一度は発音ができるようになってもすぐに戻ってしまったり、文章の音読や発表の際には、発音を意識することさえ忘れてしまっていることが多く、なかなか正しい発音が定着しなかった。

そこで、秋学期では学生が主体的に発音について考え、学生自身でも練習が続けられるよう、「自己モ

ニター」を活用した方法（河野 2014[1]）を取り入れてみることにした。本実践での「自己モニター」とは「教師が教え込むのではなく、学習者自身で感じとること、つかみ取る[2]」（河野 2014）ことで、発音練習では、この自己モニターをする力を養うことを目的に、分節音の「聞き分け」と「言い分け」の練習を通して、独自の発音基準を作り、発音への意識を高めることによって学生自身による持続可能な練習方法の習得を目指した。

また同時に、学生自身による発音練習の困難点である、正しく発音できているか確認できないという課題を解決するため、パソコンやスマートフォンなどの「音声入力」機能を利用し、発音の自主練習に有効かどうかも検証することにした。

2. 実践の概要

2-1. 学習者（表 1）

学習者は城西短期大学ビジネス総合学科に在籍するベトナム人留学生 2 名である。実践開始時点の日本語のレベルは、1 名は中級下位（日本語能力試験 N3、CEFR[3] B1 相当レベル）で、N2 の合格を目指していた。もう 1 名は中級上位（日本語能力試験 N2、CEFR B2 相当レベル）で、N1 の合格を目指していた。

両者とも日本語学習歴は発音指導を開始した 2023 年 9 月末時点で約 3 年程度（ただしそのうち約半年は短大での日本語に関連した科目でのみ）で、発音指導を受けた経験については、その場で先生などに直されたり、インターネットなどを利用して自主練習する程度であった。

【表 1】実践開始時点（2023 年 9 月）での学生のレディネス

	出身地	入学時期	日本語学習歴	日本語のレベル	本格的な発音指導を受けた経験
1（A）	ベトナム南部	2023 年 4 月	約 3 年（ベトナムおよび日本の日本語学校、短大）	中級下位	なし
2（B）	ベトナム北部	2023 年 4 月	約 3 年（日本の日本語学校および短大）	中級上位	なし

2-2. 使用教材および使用ツール

本実践では 1 回目と最終回（11 回目）で発音の上達度を見るために音読の教材として 2 つの教材を使用した。

①学生が履修している科目「日本語 6」の授業で使用していた教科書

『中級から伸ばすビジネスケースで学ぶ日本語[4]』より、「ユニット 3 コーチ」第 2 段落文章

②ベトナム人が苦手とする発音について取り上げている参考書

『ベトナム人に日本語を教えるための発音ふしぎ大百科[5]』より「発音チェックシート」

また、2 回目から 10 回目では、ディクテーションや「聞き分け」「言い分け」の練習で使用したオリジナルシートやペープサートを準備した。

さらに、全体を通して音声を振り返るためにパソコンで毎回録音し、さらに音声入力の有効性を見るために、「Microsoft OneNote」アプリを使用した。

2-3. 実施期間

実施期間は授業期間中 2023 年 9 月 26 日から 12 月 5 日までの 11 回で、学生が履修している科目「日本

語 6」（火曜日 3 限目）の授業内で実施した。毎回の所要時間は、1 回目は約 60 分程度、2 回目以降は毎回 30 分程度で行った。

2-4-1. 全体の流れ

全 11 回の発音指導のうち、1 回目と最終回には「Microsoft 365 の Forms」を使ってアンケート（表 3、4）を実施し、必要に応じてフォローアップインタビューを行った。なお、アンケートの内容は先行研究（品川 2011[6]）を参考に作成し、実際のアンケートの各問には学生が答えやすいように回答例をつけ、回答はベトナム語でも良いこととした。また、発音の上達度を確認するために、同じ文章の音読と録音・音声入力を行い、クラス全体および個人で発音についての振り返りを行った。特に 1 回目には、振り返りの際、できている発音・できていない発音について改めて確認する時間を取った。その後、2 回目から行う「聞き分け」「言い分け」「独自基準」についての説明および練習を行った。

2 回目から 10 回目は自己モニター力を養うための練習・指導が中心で、学生自身が苦手だと認識していた分節音や、前述の使用教材（金村・松田 2020）を参考にベトナム人が苦手とする分節音を取り上げ、1）苦手な発音を含む単語のディクテーションをする　2）1）の単語をパソコンやスマートフォンに音声入力する / 正しく表記されるかをみる　3）単音の「聞き分け」をし、学習者の独自基準をメモする　4）単語の「聞き分け」をする　5）単音の「言い分け」をし、学生の独自基準をメモする　6）単語の「言い分け」をする　7）前述の 1）と 2）を再度行う　という流れで行った。

全体の流れは表 2 の通りである。

【表 2】全体の流れ

回	日程	内容
1	9 月 26 日	1. 事前アンケート 2. 発音練習についての説明 3. 音読（2 種：音声入力・録音） ① 教科書の一部　② 発音チェックシート 4. 音読の振り返り 5.「聞き分け」「言い分け」の練習
2	10 月 3 日	分節音：「ざ」「じゃ」、単語：「ざま」「じゃま」 1. ディクテーション ①ざこ　②だいざ　③きょうじゃく　④だいじゃ　⑤じゃこ　⑥じゃくてん 2. 音声入力　①～⑥ 3. 単音聞き分け→独自の基準→単語聞き分け 4. 単音言い分け→独自の基準→単語言い分け 5. ディクテーション　①～⑥ 6. 音声入力　①～⑥
3	10 月 10 日	分節音：「ぞ」「じょ」、単語：「ぞうか」「じょうか」 1. ディクテーション ①じょうし　②ぞういん　③こうじょう　④ぞうし　⑤こうぞう　⑥じょういん 2.～6. は同 2 回目
4	10 月 17 日	分節音：「や」「じゃ」、単語：「やま」「じゃま」 1. ディクテーション ①やこう　②じゃくてん　③だいじゃ　④じゃこう　⑤やくてん　⑥ダイヤ 2.～6. は同 2 回目
5	10 月 24 日	分節音：「ゆ」「じゅ」・「よ」「じょ」、単語：「ゆうき」「じゅうき」・「ようじ」「じょうじ」 1. ディクテーション ①じゅうよう　②ゆうしょう　③じょうおん　④ようしょう　⑤ようおん　⑥ゆうよう 2.～6. は同 2 回目

6	10月31日	分節音：「そ」「しょ」、単語：「そうじ」「しょうじ」 1.ディクテーション ①そうだん　②しょうかい　③しょうだん　④そうかい　⑤かそく　⑥かしょく 2.～6.は同2回目
7	11月7日	分節音：「さ」「しゃ」・「す」「しゅ」、単語：「かさ」「かしゃ」・「すし」「しゅし」 1.ディクテーション ①すうじ　②さじ　③かす　④しゃじ　⑤しゅうじ　⑥かしゅ 2.～6.は同2回目
8	11月14日	分節音：「つ」「ちゅ」（語頭）、単語：「つうしん」「ちゅうしん」 1.ディクテーション ①つうがく　②ちゅうかん　③ちゅんちゅん　④ちゅうがく　⑤つんつん　⑥つうかん 2.～6.は同2回目
9	11月21日	分節音：「つ」「ちゅ」（語中）、単語：「むつう」「むちゅう」 1.ディクテーション ①こうつう　②かんちゅう　③かんつう　④ふつう　⑤ふちゅう　⑥こうちゅう 2.～6.は同2回目
10	11月28日	長音 1.ディクテーション ①はいそう　②はいそ　③こしょう　④こうしょう　⑤こしょ　⑥こうしょ 2.～6.は同2回目
11	12月5日	1.音読（2種：音声入力・録音） ① 教科書の一部　② 発音チェックシート 2.音読の振り返り 3.事後アンケート、まとめ

【表3】事前アンケートの内容（発音指導初日）

	質問
1	名前
2	ベトナムのどこから来ましたか。
3	ご両親の出身地はどこですか。
4	今までどのくらい日本語を勉強しましたか。
5	今までどこで日本語を勉強しましたか。
6	日本語の勉強で何が一番大事だと思いますか。大事だと思う順に上から並べてください。 ・文法　・読解（読む）　・作文（書く）　・聴解（聞く）　・会話 / スピーチ（話す） ・発音　・アクセント　・イントネーション　・日本語能力試験などの試験対策
7	今までの日本語クラスで、どのような発音の練習をしましたか。
8	自分の発音をどう思いますか。発音できない（苦手だ）と思うものにチェックを入れてください。 ・アクセント　・イントネーション　・拍、リズム　・促音　・長音　・撥音　・その他
9	苦手な言葉があったら書いてください。日本語の先生や日本人から言われたことがあったら書いてください。
10	日本語を話すときに気をつけていることはありますか。

【表4】事後アンケートの内容（発音指導最終日）

	質問
1	発音練習を通して自分の発音はどうなったと思いますか。変わりましたか。 ①　とてもよくなったと思う ②　少しよくなったと思う ③　変わらない ④　あまりよくなったと思わない ⑤　悪くなったと思う ⑥　わからない
2	前の質問について、何が、どういう点でそう思いましたか。
3	今、自分の発音で問題があるのはどの点ですか。 ・アクセント・イントネーション・拍、リズム・促音・長音・撥音・その他

4	発音がうまくできない時や、日本人に通じない時などはどんな気持ちですか。
5	授業で行った「聞き分け」「言い分け」の練習や録音は役に立ったと思いますか。
6	発音の向上のために自分が積極的（せっきょくてき）に取り組んだことはなんですか。 ・日本人と日本語で話すようにした ・日本人の発音をまねするようにした ・授業で録音したように、自分でも録音して聞くようにした ・教科書を読む時に気をつけるようにした ・自分の発音を日本人に確認してもらうようにした ・その他
7	前の質問でやった内容について、やってみてどうでしたか。
8	今回は発音の練習を、授業で先生と一緒にしましたが、自分でも練習を続けられると思いますか。発音の練習はこれからも必要だと思いますか。
9	発音の練習はこれからも必要だと思いますか。
10	前の質問について、どうしてそう思いますか。
11	発音の練習について、思ったことを自由に書いてください。

2-4-2. 発音練習の手順

2回目から10回目には、主に「自己モニター力」を養うための「聞き分け・言い分け」の練習を実施した（画像1）。練習では、学生が苦手とする「分節音」とそれを含む「単語」を取り上げ、その単語のディクテーションおよび音声入力も行った。

練習を進めるにあたり、オリジナルのディクテーションシートと独自基準を記入するための「聞き分け・言い分け」シート（画像2）、また、正しく音が聞き取れているか（言えているか）の確認をするためのペープサート（札）を準備した。

手順は先述の「自己モニター」を活用した方法（河野 2014[7]）を参考に以下のように行った。

1）苦手な発音を含む単語のディクテーションをする。

2）1）の単語をパソコンやスマートフォンに音声入力する / 正しく表記されるかをみる。

3）分節音の「聞き分け」をし、学習者の独自基準をメモする。

例）「ざ」、「じゃ」の場合：

① 「ざ」=A、「じゃ」=Bとし、AとB両方のモデル音声（教師の発音）を十分に学生に聞かせる。

② A（もしくはB）の音声を学生に聞かせ、AかBの札を提示させる。

③ その後、正しい方の札を教師が提示する。

④ 独自基準をシートに記入する（ベトナム語・日本語どちらも可）。

⑤ 自分が考えた基準をクラス内で共有する。教師は発表の内容を板書する。

4）単語の「聞き分け」をする。

5）分節音の「言い分け」をし、学生の独自基準をメモする。

例）「ざ」、「じゃ」の場合：

① 「ざ」=A、「じゃ」=Bとし、学生Aがいずれかの音を言う。

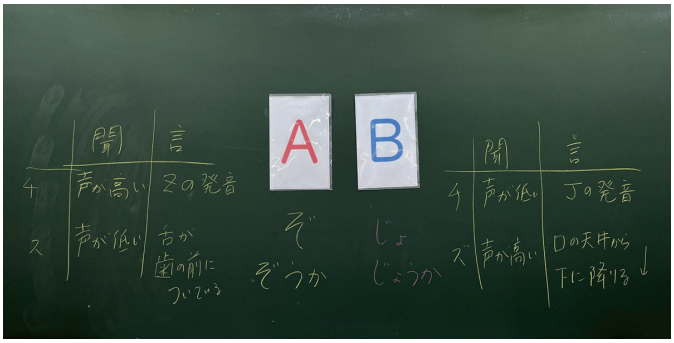
② 聞いていた学生Bと教師は聞こえた方の札を提示する。

③ その後、正しい方の札を学生Aが提示する。

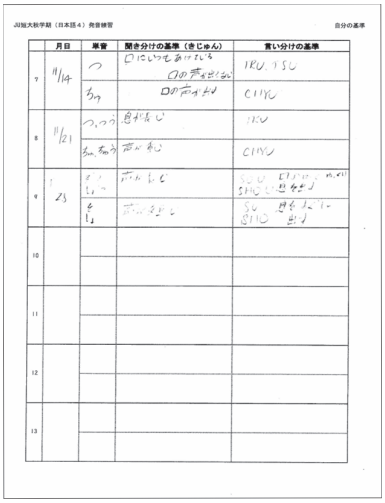
④ 独自基準をシートに記入する（ベトナム語・日本語どちらも可）。

⑤ 自分が考えた基準をクラス内で共有する。教師は発表の内容を板書する。

6）単語の「言い分け」をする。
7）1）と 2）を再度行う。



【画像 1】学生が発表した独自基準の様子



【画像 2】学生が記入した独自基準シート

3. 実践の結果および考察

ここでは、本実践の目的であった「自己モニターをする力を養う」「学生の発音への意識を高める、持続可能な練習へ繋げる」「音声入力の有効性についての検証」を中心に結果と考察を述べる。

3-1. 「自己モニターをする力を養う」

「1. 実践の背景」でも述べた通り、ここで言う「自己モニター」というのは、「教師が教え込むのではなく、学習者自身で感じとること、つかみ取る[8]」（河野 2014）ことで、本実践ではその力を養うということを大きな目的の一つとしていた。

11 回目に行ったアンケート（表 4）に「5. 授業で行った『聞き分け』『言い分け』の練習や録音は役に立ったと思いますか。」という質問があるが、この質問に対して、学生 A は「非常に良くなったり、自分の発言や長音などが間違う所は気づいたりする。（原文のまま）」と答えている。このことからも学生が発音をする際に、教師の指示がなくても発音を自己モニターしている様子が窺える。また、学生 B もこの質問に「役に立たられました。（原文のまま）」と前向きな回答をしており、発音の練習方法が一つ増えたという点では、学生にとって有益な時間であったと考える。

また、実践を始めるまでは、発音に自信がなく、上手になりたいと思いながらも、教師やクラスメイトが発した発音を聞き流していた学生が、練習を重ねるごとに少しずつ注意深く聞くようになり、クラスメイトに対しては遠慮なく間違いを指摘する姿を見せるようになった。このような発音に対する姿勢の変化からも、学生は練習を通して、まず発音を「注意深く聞く」というインプット、そして「よく観察（分析）する」というモニタリングが以前と比べて多少なりともできるようになったのがわかる。

このようなことからも、「自己モニターをする力を養う」という点において、本実践はその目標に近づく一歩となったのではないだろうか。

3-2. 「発音への意識を高め、持続可能な練習へ」

次に、「発音への意識を高める」「持続可能な練習へ繋げる」という点についてみてみる。

学習者への発音練習の意識づけという面では、授業での学生の発音に対する姿勢の変化が見られたことからもある程度の成果が得られたように思う。また事後アンケート（表4）でも、「6.発音の向上のために自分が積極的（せっきょくてき）に取り組んだこと」という質問について、学生ＡもＢも「日本人と日本語で話すようにした」と言う項目を上位３つの中の一つに選んでいた。これは、それまではうまく発音できずに伝えるのを諦めたり、苦手な発音を避け、別の言葉に言い換えたりしていた学生からすると大きな変化だと言える。

また、「持続可能な練習」という点では、事後アンケート（表4）の「8.今回は発音の練習を、授業で先生と一緒にしましたが、自分でも練習を続けられると思いますか。」という質問で、「はい、授業の後、いつも自分で発音を練習している。」（学生A）、「続けようと思っています。」（学生B）と答え、両者とも発音練習を継続しようという意志が窺えた。また、前述の「6.自分で取り組んだこと」の回答として、「日本人と日本語で話す」のほかに「日本人の真似をする」「教科書を読む時に気をつける」「自分でも録音して聞く」など、「自己モニター」が必要な項目を上位３つに選んでいることから、少なくとも「発音を注意された時にその場で直す」だけで終わらせるのではなく、自主的に練習を続けようとする前向きな姿勢が窺えた。

このようなことから、「自己モニター」を使った本実践の発音練習・指導は、学生自身が主体的・自律的に発音練習を続けることができるという気づきに繋がったのではないだろうか。

3-3. 「音声入力の有効性についての検証」

発音の練習は、正しく発音できているか確認ができないため、なかなか独りで練習をするのは困難である。本実践では、その課題を解決し、学生自身が主体的・自律的に発音練習ができるようになるための一つの手段として、パソコンやスマートフォンなどの「音声入力」機能が発音の自主練習に有効かどうか検証することにした。

本実践では１回目から最後の11回目まで、音読（例1）やディクテーション（例2）で使用した言葉の音声入力を試みたが、学生が発した言葉を音声入力システムが判断し示したものと、教師が聞こえたものとでは、異なっていることが多かった。音声入力システムの場合、人にはそのように聞こえていなくても、データから入力された音声により近い言葉を検索し出力しているようだった。

例1）１回目に実施した音読文の音声入力（学生A）：「コーチ[9]」より

＊太字は本文と異なる言葉（句読点は除く）

本文	これに対してコーチは、品質がよくファッション性の高い高級品を「手の届く」価格で販売しました。コーチの中心価格は、従来の高級ブランドに比べると、比較的身近に感じる価格帯です。これは消費者に「信頼のおける品質の高級なバッグを買いながらも、同時に生活の他の部分にもお金を使える」という機会を提供したことにほかなりません。また、デザインから生産、流通に至るまでの優れたサプライチェーンを駆使して、新しいデザインを毎月発表、発売してきました。新しい商品を次々と発売して飽きさせないことによって、定番商品が主であるブランドバッグに対して女性が持つ意識を、「一生もの」からそれぞれのスタイルや場合に応じて使い分ける「ファッションアイテム」へと変化させたのです。こうして、価格を抑えつつ購買意欲を刺激することで購入する回数を増やし、全体の売り上げを伸ばしたと考えられます。
音声入力	これに対して**こっち**は品質がよくファッション性の高い**硬球**を手の届く価格で販売しました**こっち**の中心価格は**上昇はい**の高級ブランドに比べると比較的身近に感じる**額がくたい**ですこれは**商品さん**に信頼のおける品質の高級なバッグを買いながらも同時に生活の**ほかの部分にほかの部分**にもお金を使えるという機会を提供したことにほかなりませんまたデザインから生産流通に至るまでの**すぐ優れたまた**サプライチェーンを駆使して新しいデザインを毎月発表８倍してきました新しい商品の**続々と**発売して飽きさせないことによって定番商品や主であるブランドバッグに**出してそう**女性が**持ち**意識を**一章一章もの**からそれそれぞれのスタイルや場合に**おじて**使い分けるファッションアイテム**へへ**と変化させたのですこうして価格を抑えつつ購買意欲を刺激することで購入する回数を増やし全体の売上を**逃した**と考えられます

教師による書き起こし	これにたいして、コーチは**へんしちゅ**がよく、ファッション性の高い、**こ、高級品**を**てい**の届く、価格で販売しました。コーチの中心価格は、従来の高級ブランドに、比べると、比較的、身近に感じる**かく、か、**価格帯です。これは**商品者**に、信頼のおける品質の、高級なバックを、かいながらも、同時に、生活の、ほかの**ぶぶに**、ほかの部分にも、お金を、使える、という機会を、提供したこと、に、ほかなりません。また、デザインから、生産、流通、に至るまで、の、**すぐ、**優れた、**サブライチェン**を駆使して、新しいデザインを、**まいちゅき**発表、**はちゅばい**して**いきました**。新しい商品を、**ちゅぎちゅぎ**と、**はちゅばい**して、**あっきさせない**ことによって、定番商品や、おもで、あるブランドバックに対し**て、そ、じょせ**が、**もちゅ**、いしきを、**いしょ、いしょもの**から、**しょれじょれ**の、スタイルや、場合に応じて、使い分ける、ファッション、アイテムへ、**へ**と変化させたのです。こうして価格を、抑え**ちゅちゅ**、購買意欲を、刺激することで、購入する、回数を、増やし、全体の売り上げを、伸ばした、と考えられます。

例 2）9 回目に使用した言葉の音声入力（学生 A、練習前）

発音する言葉	こうつう	かんちゅう	かんつう	ふつう	ふちゅう	こうちゅう
音声入力	**鉤虫**	**ランチ**	**ガンツウ**	**府中**	府中	**50**
教師による書き起こし	こうつう	かんちゅう	かんつう	ふつう	**ふつう**	こうちゅう

このように、パソコンやスマートフォンを利用した音声入力には限界を感じるが、その限界を理解したうえで、独りでできる発音練習の方法としては有用なのではないだろうか。

他大学の学生で、スマートフォンの辞書を使用する際に、音声入力で言葉の意味を調べようとしているが、発音が悪くて正しい言葉が表示されず苦労している場面を何度も目にしている。正確に発音でき、正しく音声入力ができるようになれば、辞書を使ったり、文章を書いたりするときに便利だという体験をさせることも、発音の改善意欲につながるかもしれない。

発音指導だけでなく、全てのことで言えることであるが、教師の役割の一つとして、複数の練習方法を提示し、学習者が自分の学習スタイルにあった練習方法を取捨選択できるようにする機会を提供することが挙げられる。同時に、教師が良いと思った学習方法がどのように有用なのかを学習者に実体験として理解させる必要もあるだろう。

4. まとめと今後の課題

本実践では、発音指導の一環として、学生が主体的・自律的に発音の練習ができるようになることを目的として、学習者が苦手とする個々の分節音の発音について取り上げて練習した。本実践の目的の一つである「学習者への発音練習の意識づけ」という面では、ある程度の成果が得られた。

実践の最終回に学生たち自身が 1 回目の音声と聞き比べて「まだ完璧ではないが、発音が改善していると思った」と率直な感想を述べたことや、事後アンケート（表 4）でも「1. 発音練習を通して自分の発音はどうなったと思いますか。」という問いに対して、学生 A は「弱点、増加、家族、どうぞ」などの語彙を挙げ、「少しよくなったと思う」と答え、学生 B は「“つ”“ぞ”“じゃ”とか長音も良くなった」「とてもよくなったと思う」と答えていることから、発音は意識して練習すれば良くなるという実感を持てたと推察でき、このことは率直に練習の成果だといえるであろう。

一方で、日本語教師の視点で個々の音に注目して聞き比べてみると、確かに 2 回目で改善が見られた発音もあったが、発音に関する課題は、音の長さ、リズム、アクセント、イントネーションなど、分節音以外のところにも多々存在していることが明確となった。苦手な音が正確に発音できるようになったとしても、留学生たちが普段の生活でコミュニケーションをとる相手は、音声学的な視点を持って発話を聞いているわけではないため、全体的な印象として「発音がうまくなった」と評価されにくいのではないだろうかという懸念が残る。

留学生の発音に関する課題は、①意思疎通にかかわる分節音、②話し手と聞き手がお互いにストレスを感じずにコミュニケーションできる流暢さ（分節音以外の発音要素）、この２点をバランスよく改善させていかなければ、「発音が悪い」という評価がいつまでもつきまとう結果となることも考えられる。本実践を通して、こういった守備範囲の広さが発音指導の難しさなのだと実感した。また、今回は同じ国の学生２名という条件での実践だったが、多国籍・大人数クラスになった場合での発音指導の方法の開発が今後の課題であろう。

（注）

1　河野俊之（2014）『日本語教師のための TIPS77 第３巻　音声教育の実践』くろしお出版 , pp.39-65
2　河野俊之（2014）『日本語教師のための TIPS77 第３巻　音声教育の実践』くろしお出版 , p.41
3　ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages:Learning, teaching, assessment）
4　高見智子（2014）『中級から伸ばす ビジネスケースで学ぶ日本語』「ユニット３　コーチ　アクセシブル・ラグジュアリー・ブランドとしての成功」第２段落 , p.54
5　金村久美・松田真希子（2020）『ベトナム人に日本語を教えるための発音ふしぎ大百科』ひつじ書房、「発音チェックシート」, pp.16-17
6　品川なぎさ（2011）「『発音チェックシート』を用いた発音指導の試み」小出記念日本語教育研究会（19), pp.91-103
7　河野俊之（2014）『日本語教師のための TIPS77 第３巻　音声教育の実践』くろしお出版 , pp.46-60
8　河野俊之（2014）『日本語教師のための TIPS77 第３巻　音声教育の実践』くろしお出版 , p.41
9　高見智子（2014）『中級から伸ばす ビジネスケースで学ぶ日本語』「ユニット３　コーチ　アクセシブル・ラグジュアリー・ブランドとしての成功」第２段落 , p.54 より抜粋

（参考文献）

金村久美、松田眞希子（2020）『ベトナム人に日本語を教えるための発音ふしぎ大百科』ひつじ書房
河野俊之（2007）「音声教育と日本語教育と第二言語習得研究」言語文化と日本語教育 2007 年 11 月増刊特集号【講演録】
河野俊之（2014）『音声教育の実践（日本語教師のための TIPS77 第３巻)』くろしお出版
重川・中村（2005）「ベトナム人学習者への発音指導の一例」日本語教育方法研究会誌 12 巻２号 , pp.22-23
品川なぎさ（2009）「上級日本語学習者を対象とした発音指導の試み」尚美学園大学総合政策研究紀要（18), pp.199-211
品川なぎさ（2011）「『発音チェックシート』を用いた発音指導の試み」小出記念日本語教育研究会（19), pp.91-103
矢野・石河・ 清水・ 山本（2018）「短期留学生を対象とした日本語集中プログラムでの音声教育の取り組み ―カンボジア人学生とベトナム人学生の発音の困難点に着目して―」日本語教育方法研究会誌 25 巻１号 , pp.2-3